

2024 年度第 2 四半期決算 主な質疑応答

広報・IR部

【全体】**Q：今回示された通期営業利益計画 1,300 億円はコミットメントできるレベルなのか？まだ下振れリスクがあるのか？**

A：今回示した通期営業利益計画は保守的に見積もった数字。2月に発表した期初想定は上期 600 億円、下期 900 億円で、上期実績は 567 億円だったため期初想定に対して 33 億円下回った。今回示した通期営業利益の下期計画は 733 億円で、期初の想定より 167 億円引き下げている。リスクは織り込み済みで、達成可能性は高い。

Q：今回示した業績予想におけるアップサイドポテンシャルとダウンサイドリスクを教えてください。

A：アップサイドポテンシャルがあるのは電子部材、パフォーマンスケミカルズ、エッセンシャルケミカルズ。電子部材は状況によっては上振れの可能性がある。パフォーマンスケミカルズは旺盛な引き合いがある中、能力増強をしているので上振れてもおかしくない。エッセンシャルケミカルズは市況が今より低水準にならないと思うのでプラスになる可能性がある。ダウンサイドリスクがあるのは、バイオ医薬品 CDMO 事業。かなりリスクを織り込んでいるものの、米国の状況を引き続き慎重に見ている。

Q：下期業績予想について、期初予想と今回予想を比較した際のセグメントごとの強弱は？

A：期初の予想に比べ電子とオートモーティブは上振れし、ライフサイエンス、その他の事業は下振れすると見ている。

【建築ガラスセグメント】**Q：建築ガラスの地域別の需要動向およびマージンの見通しは？下期は上期比で増収増益を予想しているが、リスク要因はあるか？**

A：アジアは上期に低調だった日本が回復基調にあり、補助金需要もあり増収増益になる。欧州はロシア事業の売却影響があるが、価格政策や一部設備の稼働調整などにより、収益改善に取り組む。

【オートモーティブセグメント】**Q：自動車生産台数が期初想定よりも弱含んでいると思うが、なぜオートモーティブの通期業績予想を据え置いたのか？数量・価格の前提を見直したのか？**

A：数量・価格の前提は見直していない。上期はお客様の品質問題等の影響を受け、数量は想定を下回ったが、年間ではお客様の数量が回復し、期初予想通りの着地となるだろう。価格政策と合わせ構造改革もしており、この効果が発現する。

【電子セグメント】**Q：ディスプレイ事業の構造改革の進捗と見通しは？価格については、現状は「円ベース」となっているが見直す可能性はないか？**

A：構造改革は順調に進んでいて、能力の削減も進んでいる。設備の生産性も向上しコストも下がっている。円ベースでの取引については、業界での慣習で当社以外のガラスの取引も「円ベース」となっている。当社がリードして変えることは難しい。

Q：ディスプレイ事業について、1Q比での2Qのパネルメーカーの稼働率状況は？また、その下期見通しは？パネル価格が下がり始めたなかで、さらなる価格改定への手応えは？

A : ディスプレイ用ガラスの需要全体の観点では、2Qは1Q比で一桁後半%増。3Qは2Q比で一桁前半%の減少を見込む。
価格改定は他のメーカーでも取り組んでいるようだが、当社も引き続き積極的に取り組んでいく。

Q : ディスプレイ事業の下期営業利益は上期比でどのように見ているか？また、2Qのディスプレイの販売量、価格動向は？

A : 下期の営業利益は上期と同等レベルと見ている。円安が続いているが、生産性向上あるいは構造改善の効果でカバーしていく。2Qの数量はQoQで一桁後半%増加だった。2Qの価格はQoQで品種構成の関係からやや減少したが、値下げ等はしていない。

Q : EUVマスク blanksの2QのQoQ、YoYの数量の伸びは？

A : 具体的な話は出来ない。売上高は、24年に23年比1.5倍以上となる見通し。売上高400億円突破の可能性が高く、それに沿って順調に推移している。

Q : 半導体市場が回復局面にあるなか、電子部材の2Q売上高が1Q比で横這いとなったのは少し意外だった。1QはEUVマスク blanksが少し強く出ているのか？電子部材の主要製品別のQoQの動き、下期見通しについて解説してもらいたい。

A : 半導体関係の製品は堅調な状況が継続している。2Qはオプトエレクトロニクスが不需要期であり、電子部材の売上高は1Q比で横ばいとなった。下期の見通しだが、電子部材は下期型の事業であるため、上期比で増収増益となる。

Q : EUVマスク blanksの年間売上高400億円以上を今期達成する確度は？

A : 期の半ばで確約できないが、出荷は増加基調であり、達成確度はかなり高まっている。

Q : オプトエレクトロニクスを中心に、2Qに大手スマホ関連などで需要の前倒しのような動きは見られたか？通常の季節性と異なり「旧モデル向けの需要が強い」などと聞くことが多いが、AGCはどうか？

A : 需要の前倒しは特に聞いていない。下期に出荷増加と見ている。以前はクリスマス商戦、春節に向けて、10月11月に出荷が相当集中することがあった。以前に比べると出荷の集中は無くなったが、下期型に変わりはない。

Q : EUVマスク blanksは今期売上高400億円に達する可能性があるが、ロジックファブリー・DRAMの構成比率は？AGCの技術はTOPメーカーと変わらない水準か？ガラスコア基板の進捗は？

A : ロジック・DRAMの比率では、ロジックの方が今のところは圧倒的に大きい。技術はTOPメーカーと変わらない水準。お客様評価のポイントが違うものの、我々はTOPレベルの技術を持っていると考えている。ガラスコア基板は、ガラスメーカーとして、基板を持ち加工技術も持っており、将来の期待は大きい。本中計に利益が出てくるような性質のものではなく、本格的には2030年代に大きく花開く事業と位置付けている。

Q : 電子セグメントの2Qのマージンが急上昇した理由は？

A : ディスプレイのコスト改善の効きが大きかった。販売数量が増加したことに加え、構造改善や生産性改善の効果が2Qに大きく発現した。電子部材は、半導体関連は堅調だったが、オプトエレクトロニクスが不需要期だったため、1Q比で売上高は横ばいだった。

【化学品セグメント】

Q : クロールアルカリ市況について、2Qは中国からインドへの供給が限られていたと思うが、その影響は何かあったか？また、インドのBIS認証義務化は、AGCにとりプラスなのか？マイナスなのか？

A : 大きな影響はない。市況面では、年初のエチレン高は解消し、コンテナ不足が塩ビの価格を上げるといった、プラス材料がない

ことは無いが、大きな転換ではなく、今のような状況が続くと考える。インドの BIS 認証義務化についても大きなインパクトはない。

【ライフサイエンスセグメント】

Q：ライフサイエンスの下期営業利益計画は上期比で 40 億円程度の利益改善を想定しているが、その理由は？

A：稼働の問題も解消へ向かい、需要状況も明るさが出てきている。下期には、米国のボルダー工場での稼働率向上、遅延が生じていたデンマーク新設設備の稼働開始などが貢献する。

Q：バイオ医薬品 CDMO 事業の足元の状況と来期以降の考え方は？また今回、減損損失を出したことによる来期以降のリストラマージンはどれくらい発生するか？

A：来期に急回復とはならないが、足元の引き合いは増えている。ライフサイエンスの今の実力では、2026 年に黒字化、次期中計で早期に営業利益 300 億円達成を目指す状況にある。今回の減損は「のれん」が大きい。「のれん」は償却しておらず営業利益への影響は無い。この為、減損損失計上に伴う減価償却費の減少は年間でも二桁前半億円程度。今行っている人員削減によるリストラ効果額は年内で約 10 億円。来期は年間フルで効くため、もう少し大きな効果が出る。来期以降、増益基調には戻せると考えている。

Q：Lonza の決算などで開発初期向けの需要回復の兆しがあると強調されている。AGC のバイオ医薬品 CDMO 事業の引き合いや受注状況などを踏まえて、下期以降の事業環境について解説いただきたい。

A：米国の金利高に伴うバイオベンチャーへの資金流入減により開発品の受注や引き合いが減っている。今年に入り、止まっていた開発品の受注が回復している。これは、新薬の開発を止めたままには出来ないことと、今年下期の米国金利政策の変更を期待しての動きと推定している。この動きは 1 年後、または 2 年後には売上増に繋がると考えている。今年の下期に関しては、米国のボルダー工場が本格稼働をする。また、デンマークの新しい設備の稼働が始まり、収益の改善に貢献する。

Q：バイオ医薬品 CDMO 事業は需要が戻ったときに、本当に利益が出るのか？現状のコスト構造にどういった問題意識があり、損益分岐点売上高を改善させるためにどういった施策を考えているか？決算説明資料 P41 の内容も含めて解説いただきたい。

A：決算説明資料 P39 にあるとおり、製造にかかる固定費を売上でカバー出来るかどうかで収益が決まる。売上が戻れば確実に利益が出る構造になっている。もともと利益性は低くない事業なので、ある一定の受注が取れば利益は出せる。

Q：決算説明資料 P27 の説明にあるデンマーク増設工事の遅延は、最近の新しい話か？いつの予定がいつ頃へ後ろ倒されたか？また、契約済み案件の遅延というのは、様々あると思うが、主には米国ボルダーの新ラインのことを指しているか？そうであれば、遅延の程度と、AGC 側の問題か顧客要因かについて確認させてほしい。

A：決算説明資料 P39 にあるとおり、デンマークの動物細胞の増設設備は 2023 年半ばに稼働の予定だったが、建設での人員不足等が要因で約 1 年遅れた。米国ボルダーでは受注済みの案件については、作れば確実に売上・利益が出るものだが、立ち上げが遅れた。シアトルは、昨年設備の改善で受注を絞ったが、新たな案件を獲得できず苦しんでいる。デンマークでは、能力増強の遅延を理由に本来決まっていたお客様からの受注がなくなり販売減が発生。お客様要因によつての遅延もあるが、かなりの部分は当社の設備上の問題・稼働の問題が要因。

Q：バイオ医薬品 CDMO の減損について、米国は「のれん」に加え、「有形固定資産およびのれん以外の無形資産」もその対象となった。米国ボルダーの将来の受注見通しが悪化したためか？

A：米国はヨーロッパの 2 つの拠点に比べ、将来見通しと足元の状況が非常に厳しい為、「のれん」を超えた減損となった。米国の減損は、遺伝子細胞治療のロングメントと動物細胞の開発案件を主に受託しているシアトルが中心で、商業案件を扱う

ボルダーは極めて限定的だった。

以上